

原文(文繁本)	佐藤春夫訳
<p>卻說美猴王榮歸故里，自剿了混世魔王，奪了一口大刀，逐日操演武藝，教小猴砍竹爲標，削木爲刀，治旗幡，打哨子，一進一退，安營下寨，頑耍多時。</p>	<p>さて美猴王の孫悟空ははなばなく故郷へ歸り、混世魔王をまつたくたいちして一ふりの大刀をぶんどりして以來、毎日武藝のれんしふにつとめ、小猿どもに言ひつけて竹を切つて槍をつくらせたり、木を刀にしたたり、旗吹流しを用意し、呼子の笛を吹き鳴らして進ませたり退かせたり調練で、國の防備を心がけることひさしかつたが、</p>
<p>忽然靜坐處，思想道「我等在此，恐作耍成真，或驚動人王，或有禽王、獸王認此犯頭，說我們操兵造反，興師來相殺，汝等都是竹竿木刀，如何對敵？須得鋒利劍戟方可。如今奈何？」</p>	<p>ふと氣がついて言ふには——『この場合我々は大きいに用心しなければ或は人王をおどろかしたり、或は獸王(けものの王様)や禽王(鳥の王様)などの氣にさはつて我々が武をねるのを謀叛と誤解されて軍兵をさし向けられ、せめよせられてころし合はなければならぬはめに立ちいたつたなら、お前たちのはみな竹ぎれや木の刀だから、どうしてこの敵に對抗することが出來ようか。するどい武器皆用意しておかないではどうにも相なるまい。』</p>
<p>衆猴聞說，個個驚恐道「大王所見甚長，只是無處可取。」</p>	<p>といふ言葉を聞いて猿どもは、みなそれぞれに大きいにおどろきおそれて、『大王のお言葉は至極ごもつともでございます。今のまゝでは全くしやうがございません。』</p>
<p>正說間，轉上四個老猴，兩個是赤尻馬猴，兩個是通背猿猴，走在面前道「大王，若要冶鋒利器械，甚是容易。」</p>	<p>この話のなかにまぎれこんで來た四匹の大猿、二匹は赤じりの馬猴、二匹はせなかの眞すぐな大猿であつたが、大王の面前へまかり出て申し上げるに、『大王さま、もしするどい打物をご入用ならば、それは手もないことでございます。』</p>
<p>悟空道「怎見容易？」</p>	<p>『どうすればいゝと申すのか。』と悟空が問ふと、</p>
<p>四猴道「我們這山向東去，有二百里水面，那廂乃傲來國界。那國界中有一王位，滿城中軍民無數，必有金銀銅鐵等匠作。」</p>	<p>四匹の大猿どもは、『このお山の東の方二百里ほど向かふの水のほとりに傲來國といふ國がございまして、その國には一人の王がをられ、國內には人民も軍勢も無數にございますから、金銀や銅錢などの細工人もきつとをりませう。</p>
<p>大王若去那裡，或買或造些兵器，教演我等，守護山場，誠所謂保泰長久之機也。」</p>	<p>王がそこへお出かけ遊ばされて、兵器をおつくらせになつてお買い上げなされ、我々どもに武藝をおしこみ下されますならば、お山をお守り申して、お山は永久に泰平なわけがございませう。』</p>
<p>悟空聞說，滿心歡喜道「汝等在此頑耍，待我去來。」</p>	<p>これを聞いて悟空は大きいに満足し、よろこんで申すに、『よし、お前がた、しばらくこゝに待つてをれ、わしはちよつくら行つて來よう。』</p>
<p>好猴王，急縱筋斗雲，霎時間過了二百里水面。果見那廂有座城池，六街三市，萬戶千門，來來往往，人都在光天化日之下。</p>	<p>悟空はさつそく例の筋斗雲の法によつてまたくまに二百里の外の水ぎはまで來てしまふと、はたしてそこには大都市があつて、道路も縦横に通つて家々の立ち並んだなかに往來の人々は天下泰平の光に浴して文化をたのしんでゐるらしい。</p>
<p>悟空心中想道「這裏定有現成的兵器，我待下去買他幾件，還不如使個神通覓他幾件倒好。」</p>	<p>悟空が心のなかで思ふやう「なるほど、こんなにつばな都なら、すぐれた兵器の出來合ひが用意されてゐるはずである。自分がわざわざ註文して買ふやうな、まどろっこい方法よりは、神通力によつてほしいだけもらつて行く方が、よほど氣がきいてゐるわい。」と氣がつくと、</p>

<p>他就捻起訣來，念動咒語，向異地上吸一口氣，呼的吹將去，便是一陣風，飛沙走石，好驚人也。</p>	<p>すぐ呪語をとこなへて、東南の地上に向かつて一息息をすひこんでフウとはき出すと、これが一陣の大風になつて砂は飛ぶ、石はころび出す。</p>
<p>炮雲起處蕩乾坤，黑霧陰霾大地昏。 江海波翻魚蟹怕，山林樹折虎狼奔。 諸般買賣無商旅，各樣生涯不見人。 殿上君王歸內院，階前文武轉衙門。 千秋寶座都吹倒，五鳳高樓幌動根。</p>	<p>あたり一面は黒い霧がたちこめ、木々はゆれざわめく。 林中の鳥やけものはみたゝまれないで逃げ出す。 海の波が高くなつたので魚やかにがあばれ出す。 王宮の高い塔もかたぶくばかりのいきほひに、</p>
<p>風起處，驚散了那傲來國君王，三街六市，都慌得關門閉戶，無人敢走。</p>	<p>人々はうろたへおそれてさうざうしく家のなかへ逃げこんでしまひ、傲來國の都のあらゆる町々はみな戸をとざし、門にがんぬきやがけがねをかためて、さすがにぎやかな大通も人ひとりかげも見せなくなつてしまつた。</p>
<p>悟空纔按下雲頭，徑闖入朝門裏，直尋到兵器館、武庫中，打開門扇看時，那裏面無數器械：刀、槍、劍、戟、斧、鉞、毛、鏢、鞭、鈿、搥、簡、弓、弩、叉、矛，件件俱備。</p>	<p>このありさまを見すまして悟空は、そろそろと雲のなかから町におりて出て、國王の宮殿の門内にしのび入り、すぐさま兵器庫をさがしあてゝ、庫の中のとびらを自由自在勝手にこじあけ、そのなかをゆつくりと見物すると、なかには、あるわ、あるわ、数かぎりもない兵器の種類、刀や槍や三叉の矛、劍や戟、斧やまさかり、くさり鎌、弓、石弓、そのほか名も知らず見た事もないやうな品々ばかり、</p>
<p>一見甚喜道：「我一人能拿幾何？還使個分身法搬將去罷。」</p>	<p>悟空は一目見るなり、すつかり有頂天になつてひとりごとに、『自分ひとりでは、とんと幾つものはこび出せないな。これはまた例の分身の法ではこび出すことだ。』</p>
<p>好猴王，即拔一把毫毛，入口嚼爛，噴將出去，念動咒語，叫聲「變！」</p>	<p>と悟空はすぐさま一つかみの身の毛をひきぬいて、口のなかへもぐもぐおしこんで、はき出しながら、おまじなひをとこなへて、『かはれ！』と號令をかけると、</p>
<p>變做千百個小猴，都亂搬亂搶，有力的拿五七件，力小的拿三二件，盡數搬個罄淨。</p>	<p>たちまち幾千百の小猿になつてみな手に手にさまざま兵器をそれぞれにはこび出すのであつた。力の強い奴は五つ六つを一からげに引つさげて行つたし、力のよわい者でも三つ四つづつは持ち出して、さすがに豊富な兵器庫もからつぽになるほど往復しつづけ、兵器庫と雲との間の空間には小猿の行列が橋を渡したやうにつづいてみた。</p>
<p>徑踏雲頭，弄個攝法，喚轉狂風，帶領小猴，俱回本處。</p>	<p>悟空はころあひを見はからつて、氣ちがひ風を吹きをさめると、小猿どもを引きしたがへて、雲に乗り込んで歸つて行くのであつた。</p>
<p>卻說那花果山大小猴兒，正在那洞門外頑耍，忽聽得風聲響處，見半空中丫丫叉叉，無邊無岸的猴精，說得都亂跑亂躲。</p>	<p>花果山では、るすをしてみた大猿小猿どもが水簾洞の入口で遊んでゐると、ふいに風のうなりひびく音が聞えて來たので、中空を見ると、うちやうちやと数かぎりもない小猿の精がうなりわめき、おしあつたり、あがいたり、身をかくしたり、こんざつをきはめてゐるありさまが、雲の中にありありと見えてみたが、</p>

<p>少時，美猴王按落雲頭，收了雲霧，將身一抖，收了毫毛，將兵器都亂堆在山前，叫道：「小的們，都來領兵器。」</p>	<p>やがて、美猴王は、その雲のなかに落ちついて雲や霧をとりしづめ、また毛を體の上にをさめた時には、いつのまにか花果山の前に兵器をゴたゴたと高くつみ上げて、かうさげんだものであつた—『さあ、家來ども、みんな出て來て兵器をうけ取るのだ。』</p>
<p>眾猴看時，只見悟空獨立在平陽之地，俱跑來叩頭問故。</p>	<p>と言はれて猿どもがあたりを見ると、王は唯ひとり平らかな地面の日向に立つてゐるのであつた。小猿どもははひよつて來て頭を地面にすりつけながら事のしだいを問ふのに對して、</p>
<p>悟空將前使狂風、搬兵器，一應事說了一遍。</p>	<p>悟空は兵器の山に目をそいでから風や雲を呼びおこして、これらの兵器を傲來國の都から、ここにはこんで來た一くだりをせつめいして聞かせた。</p>
<p>眾猴稱謝畢，都去搶刀奪劍，搥斧爭槍，扯弓拔弩，吆吆喝喝，耍了一日。</p>	<p>小猿どもはおどろき喜んで大王にお禮を申し上げると、さつそく刀を取り合つたり劍をさがし出したり、斧や鉞をいがみ合つたり、弓や石弓を引きずつたり、えいやえいやと持ちはこんで、これの始末に日がくれた。</p>
<p>次日，依舊排營。悟空會聚群猴，計有四萬七千餘口。</p>	<p>次の日は今までの軍隊の組織をやめて、悟空は猿の大召集を行ふと集るものは全部で四萬七千あまりもあつた。</p>
<p>早驚動滿山怪獸，都是些狼、蟲、虎、豹、麋、鹿、獐、狃、狐、狸、獾、貉、獅、象、狻猊、猩猩、熊、鹿、野豕、山牛、羚羊、青兕、狡兔、神獒……各樣妖王，共有七十二洞，都來參拜猴王為尊。每年獻貢，四時點卯。也有隨班操演的，也有隨節徵糧的。齊齊整整，把一座花果山造得似鐵桶金城。各路妖王，又有進金鼓、進彩旗、進盔甲的，紛紛攘攘，日逐家習舞興師。</p>	<p>このいきほひに山中のあらゆる怪獸ども—といふのは狼や虎、豹、狐、狸、鹿などから獅子や象、熊など、これらの怪獸どものそれぞれの妖王(ばけ物の王様)は皆で七十二洞に住んでゐたが、皆おのおのの洞を出て、水簾洞の美猴王のところへ敬意を表するために參上し、悟空を大王とあがめ奉つて絶対に服従し、毎年貢物の献上や、四季ごとに臣下の名簿を差し出し、また命令次第で召集にも應じ、臨時に兵糧ををさめることなどを慎重にきちやうめに取りきめて、この花果山は金城鐵壁の國(まもりのかたい國)となり、それぞれの妖王たちも黄金のつづみをうちならし、色どり美しい旗をおし立て、よろひかぶとを物々しくして、みな思ひ思ひにさまざまの意匠をこらし、毎日おのおのの武術をねつてゐた。</p>
<p>美猴王正喜間，忽對眾說道：「汝等弓弩熟諳，兵器精通，奈我這口刀著實榔槌，不遂我意，奈何？」</p>	<p>美猴王もはなはだ満足であつたが、ふと皆の者に向かつてかう言ひ出した—『お前がたの武藝も大へん進歩し、兵器もりつばなものになつて來た。それなのにわしのこの刀は昔風の平凡なやうで、わしはもうこれが氣に入らなくなつてしまつた。』と言ふと、</p>
<p>四老猴上前啟奏道：「大王乃是仙聖，凡兵是不堪用。但不知大王水裡可能去得？」</p>	<p>例の馬猴などの四匹の大猴が大王の前に進み出て申し上げる—『大王さまはもともと仙人で聖者でいらせられます。そんなお方には並の武器などはお役にたゝないでございませう。ところで、大王さまは水のなかへおはいら遊ばすことがお出來になりませうか。』と言ふので、</p>
<p>悟空道：「我自聞道之後，有七十二般地煞變化之功，筋斗雲有莫大的神通；善能隱身遯身，起法攝法。上天</p>	<p>悟空は、『わしは道のおくをきはめて、地の災をふせぐ七十二通の變化の功をつんでゐる。筋斗雲にはこの上なく大きな神通力がある。身をかくし、身を水火の力からのがれる力もある。法力をつくしたなら、</p>

<p>有路，入地有門；步日月無影，入金 石無礙；水不能溺，火不能焚。那些 兒去不得？」</p>	<p>天にのぼる道も、地にもぐり入る門だつて見出すことも来るし、月日の 光の中を歩いてもかげもうつらず、金石にうたれてもきずつかず、水に 入つてもおぼれず、火の中にあつてもやけないのだ。水のなかぐらみ はいれないことはないとも。』</p>
<p>四猴道：「大王既有此神通，我們這鐵 板橋下，水通東海龍宮。大王若肯下 去，尋著老龍王，問他要件甚麼兵 器，卻不趁心？」</p>	<p>そこで、四匹の大猿どもは申し上げる——『大王さまがそれほどの神 通力をおそなへ遊ばしていらせられるのなら、この鐵板橋から、水は 東海の龍宮城までついでをります。大王さまがもしおいとひ遊ばしき へなされないならば、龍宮城に大龍王をおたづね遊ばして、なにかり つばな兵器がないものかおたづねなされては、いかなものでござい ませうか。』</p>
<p>悟空聞言，甚喜道：「等我去來。」</p>	<p>この言葉を聞いて、悟空は一かたならず喜んで、『さうだ、ちよつくら行 つて來よう。』</p>
<p>好猴王，跳至橋頭，使一個閉水法， 捻著訣，撲的鑽入波中，分開水路， 徑入東洋海底。</p>	<p>美猴王は橋のあたりから飛びこんで、閉水の法といふのを使つて、術 をほどこしたので無雜作に波のなかへもぐりこんだが、水中の路は自 然に開けてすぐさま東方の大海の海そこへ入った。</p>
<p>正行間，忽見一個巡海的夜叉，擋住 問道：</p>	<p>まつすぐに歩いてみると、ふいに海を見まはる鬼が一匹あらはれ、前 方に立ちふさがって問ふのであった——</p>
<p>「那推水來的，是何神聖？說個明 白，好通報迎接。」</p>	<p>『水をおしわけて進んで来られるのは、どんな神さまでいらせられます か。はつきりお名告り下さい。お取次をしてお出むかへいたさせたく存 じます。』といふので、</p>
<p>悟空道：「吾乃花果山天生聖人孫悟 空，是你老龍王的緊鄰，為何不 識？」</p>	<p>悟空は答へていふ——『わしこそ花果山の天生聖人孫悟空といふ者 だ。お前のところの竜王さまとはこの上なしの御近所づき合ひなの に、なぜ見おぼえておかないのか。』</p>
<p>那夜叉聽說，急轉水晶宮傳報道：</p>	<p>鬼はこれを聞いて、大あわてに水晶宮へころがり入って報告をおつた へ申す——</p>
<p>「大王，外面有個花果山天生聖人孫 悟空，口稱是大王緊鄰，將到宮也。」</p>	<p>『大王さま、表に花果山天生聖人孫悟空がお見えです。自分では大 王さまとは、この上なしの御近所づきあひと名告つて、ただ今御殿に まゐるところでございます。』</p>
<p>東海龍王敖廣即忙起身，與龍子、龍 孫、蝦兵、蟹將出宮迎道：「上仙請 進，請進。」</p>	<p>東海竜王の敖広はいそぎ立ち上つて竜の子や竜孫(たつのおとしご) や、えびの軍兵や、かにの部隊長などを引き連れて御殿からお出む かへなされ、『これは仙人さま、さあどうぞ、さあどうぞ。』と、</p>
<p>直至宮裡相見，上坐獻茶畢，問道： 「上仙幾時得道？授何仙術？」</p>	<p>すぐ御殿へ通し、上座にすゑてお茶を出してから問ふ——『仙人さま、 御修行にはどれほど年月がかかりましたらうか。どんな仙術をおさづ かり遊ばしましたか。』</p>
<p>悟空道：「我自生身之後，出家修行， 得一個無生無滅之體。」</p>	<p>悟空はこれに答へて——『わたくしは生まれ出てこの方、出家して修行 いたし、老いずほろびずといふ体をさづかりました。</p>
<p>近因教演兒孫，守護山洞，奈何沒件 兵器。</p>	<p>近ごろは若い者どもにをしへこんで、山の洞をまもらせようと存じまし たのに、どうしても手ごろの物の具がございません。</p>

久聞賢鄰享樂瑤宮貝闕，必有多餘神器，特來告求一件。」	以前からこちらの御殿は金銀珊瑚、しやこのやねといふすばらしく御ぜいたくなおくらし向きとうけたまはつてをりますにつけても、きつとたくさんのおめづらしいおたから物をお持ちあはせに相違ないとぞんじまして、一ついただきたいとわざわざおねがひに参じました。』
龍王見説，不好推辭，即著鱖都司取出一把大桿刀奉上。	と、かういはれると竜王はことわることが出来ないので、すぐ鯛侍従長に命じて一ふりの大刀を取り出して「お客の仙人悟空に」上げさせると、
悟空道：「老孫不會使刀，乞另賜一件。」	悟空は、『わたくしは刀といふものは性に合ひませんでしてね、何かほかのものを頂かせて下さいますまいか。』といふ。
龍王又著鮑太尉領鱗力士，擡出一桿九股叉來。	そこで竜王は又鮑大臣に命じて、大力の鱗次官に申しつけて一本の九股叉(先の九つに分れた槍の類)を持ち出させると、
悟空跳下來，接在手中，使了一路，放下道：「輕，輕，輕，又不趁手。再乞另賜一件。」	悟空は喜んでとびついて行ったが、手にうけ取って一度ためしてみるなり、ぼいと投げ出して、『軽い、軽い。軽すぎる。一向手にこたへませぬ。どうぞもう一度別のを何か下さいますまいか。』
龍王笑道：「上仙，你不曾看，這又有三千六百斤重哩。」	竜王は笑って、『仙人さま、あなたはお気づきにならないのではございませぬか。あの槍は三千六百斤の重さでございますよ。』
悟空道：「不趁手，不趁手。」	悟空は、『手にこたへませぬので、手にこたへませぬので。』と言つてゐる。
龍王心中恐懼，又著鯁提督、鯉總兵擡出畫桿方天戟。	竜王は心中でおどろきおそれながら又、鯁提督と鯉將軍とに命じて画桿方天戟(柄に模様を描いた四角な枝のあるほこ)を持ち出させた。
那戟有七千二百斤重。	この戟は七千二百斤の重さのあるものであつたが、
悟空見了，跑近前，接在手中，丟幾個架子，撒兩個解數，插在中間道：「也還輕，輕，輕。」	悟空はこれを見ていそいで進みよつて手にうけ取つてから、いろいろなしぐさをしてみてゐたが、『これも軽い、軽い。軽すぎる。』
老龍王一發害怕道：「上仙，我宮中只有這根戟重，再沒甚麼兵器了。」	竜王も少々気にさはつたらしく、『仙人さま、わたくしどもにはその上重い戟はもうございませぬ。もうどんな兵器もありません。』
悟空笑道：「古人云：『愁海龍王沒寶』哩！你再去尋尋看，若有可意的，一一奉價。」	といふのを悟空は笑ひながら、『古の人も「海龍王ハ埋モレタ宝ヲ愁フ」とか申してをりますね。あなたもどうぞ、もう一度よく思ひ出しになつて下さいませんか。気に入つたのが見つかりましたなら、おねだんは、それぞれ献上致しますのですから。』
龍王道：「委的再無。」	『まつたくのところ、もう何もございませぬでした。』と竜王が答へた。
正說處，後面閃過龍婆、龍女道：「大王，觀看此聖，決非小可。」	この話の間に、奥から出て来た竜婆(竜王の奥方)と竜女(竜王のお姫さま)とがいふに、『大王さま、この聖人をよく御注意あそばせ。けつしてつもらぬお方ではございませぬから、
我們這海藏中，那一塊天河定底的神珍鐵，這幾日霞光艷艷，瑞氣騰騰，敢莫是該出現，遇此聖也？」	うちの海のくらのなかにあつた、あの一塊の天の河の河ぞこの神珍鐵は、この間から幾日かおぼろの光をほのぼのとはなつて、瑞気(おめでたいしるし)が立ちのぼつてをりましたが、こんなふしぎな出来事はも

	しやあれがこの聖人のお手に入るしらせではございませんでしたらうか。』
龍王道:「那是大禹治水之時, 定江海淺深的一個定子, 是一塊神鐵, 能中何用?」	『それはあの <u>大禹(支那古代の聖人)</u> が水害ををさめた時、河や海の深い浅いを定めたものさしなのだ。あの神鉄のかたまりが、何の役に立つものか。』と竜王は言ふが、
龍婆道:「莫管他用不用, 且送與他, 憑他怎麼改造, 送出宮門便了。」	竜婆は、『よその人のお役に立つやら立たないやら、こちらのかまふことではございませんわ。ともかくもあのお方にさし上げて、あのお方がどんなふうになさらうとも、うちから持ち出して行つていただいた方がよろしうございませう。』
老龍王依言, 盡向悟空說了。	竜王は竜婆の言葉で、 <u>それと気がついて</u> 、悟空にすつかりせつめいして聞かせると、
悟空道:「拿出來我看。」	悟空は、『ともかくも出して来て見せて下さい。』といふのを
龍王搖手道:「扛不動, 擡不動, 須上仙親去看看。」	竜王は手をふつて申すに、『持ち上げようつてだめですよ。とても動きません。どうぞ大仙御自身でお出かけなすつて、 <u>よくごらん下さい</u> 。』といふから
悟空道:「在何處? 你引我去。」	悟空は、『どこにあるのですか。私をつれて行って下さい。』
龍王果引導至海藏中間, 忽見金光萬道。	竜王はあんないをして海中のくらのなかへ行くと、ふいにあたり一面に金光がかがやき出した。
龍王指定道:「那放光的便是。」	竜王がそれを指さして、『あの光をはなつてゐるものが、それなのです。』
悟空撩衣上前, 摸了一把, 乃是一根鐵柱子, 約有斗來粗, 二丈有餘長。他儘力兩手擡過道:「忒粗忒長些, 再短細些方可用。」	悟空は着物のまへをかき合はせながら進み出て、そつと一さすり、手さぐりしてみると、一本の鉄のぼうで、さしわたしおほよそ一斗柵ぐらゐの太さ、長さは二丈以上(六メートル位)もある。彼は力まかせに両手でかかへあげながら、『少し太すぎる、すこし長すぎる。もつとみじかくて、もつと細い方が役に立つ。』
說畢, 那寶貝就短了幾尺, 細了一圍。	といふ言葉の終りに、このたからものは幾尺かみじかく、一まはり細くなつた。
悟空又顛一顛道:「再細些更好。」	悟空はまたそれを <u>持ちあげて</u> 、『もつと細くなればなほよい。』といふと、
那寶貝真個又細了幾分。	このたからものは、ほんたうに幾分か細くなつたのであつた。
悟空十分歡喜, 拿出海藏看時, 原來兩頭是兩個金箍, 中間乃一段烏鐵。	悟空は大そう喜んで、海のくらから持ち出して見ると、もともとその両はしは二つの金のたがで、中間はずつと黒光の鉄であつた。
緊挨箍有鐫成的一行字, 喚做:「如意金箍棒, 重一萬三千五百斤。」	しつかりはまつてゐるたがに一行の文字がほりこんであるのが、「如意金箍棒重さ一万三千五百斤」とよまれるのであつた。
心中暗喜道:「想必這寶貝如人意。」	悟空は心のうちでひとり喜びつつこのたからものはきつと人の思ひのままに動くものなのだらうと思ひながら、
一邊走, 一邊心思口念, 手顛著道:「再短細些更妙。」	<u>歩いたり、心で考へたり、口にその文句をとなへたりしながら</u> 、手でもう一度さはつていふ、『もう一度細く、もつと短くなつたらなほよい。』

拿出外面，只有二丈長短，碗口粗細。	持ち出して外へ出たら、長さは二丈にちぢまり、太さはおわんほどの大きさになってゐる。
你看他弄神通，丟開解數，打轉水晶宮裡。	そこで悟空は神通力を出して、その棒を使ひながら水晶宮の中にはいつて来たので、
誑得老龍王膽戰心驚，小龍子魂飛魄散，龜鱉鼃鼉皆縮頸，魚蝦鰲蟹盡藏頭。	老龍王は身ぶるひして胆つ玉もちぢみ心もさわぎ、小龍王は心をうしなひ気がへんになつた。かめの仲間はみな頭をちぢめこんでしまつたし、かにやえびなどは身を甲羅の下にかくした。
悟空將寶貝執在手中，坐在水晶宮殿上，對龍王笑道：「多謝賢鄰厚意。」	悟空はこの奇妙なたからものを手ににぎつて水晶宮の室内にをさまりかへり、龍王に向かつて笑ひながらいふ—『ありがたうございました、おとなりの旦那さま。』
龍王道：「不敢，不敢。」	『いやどういたしまして。』と龍王が返事をしてゐる。
悟空道：「這塊鐵雖然好用，還有一說。」	『この鉄の棒は、はなはだけつこうですが、もう一つお話があるのです。』
龍王道：「上仙還有甚說？」	『大仙人、そのお話とはどんな事でせう。』
悟空道：「當時若無此鐵，倒也罷了；如今手中既拿著他，身上更無衣服相趁，奈何？」	外でもありませんが、この鉄のない時ならばともかくも、これが手に入りましたからにはこれに似あつた身につけるものがございませぬでは不釣合ひでございませう。
你這裡若有披掛，索性送我一副，一總奉謝。」	もし適当なよろひやかぶとがございますなら、一つおあたへ下さると御恩に着ますでございませうが。』
龍王道：「這個卻是沒有。」	『ところがそんなものは何もございませぬでした。』と龍王がいふと、
悟空道：「一客不煩二主。若沒有，我也定不出此門。」	悟空は、『ことわざにも「一客二主ヲ犯サズ」(一人で幾人にも迷惑をかけるな)とか申しますから、わたくしもやはりおやしきで、よろひかぶとをたまはらないうちは御門の外へ出ることは出来ませぬ。』
龍王道：「煩上仙再轉一海，或者有之。」	『それでは大仙人さま、ごくらうさまでも、もう一度海中をさがしまはつていただきませうか。ひよつとすると、よろひやかぶとぐらゐ落ちてゐないともかぎりませぬから。』
悟空又道：「走三家不如坐一家。千萬告求一件。」	といはれたので悟空は、『「あちらこちらをかけまはるより家のなかでねてゐるのがきらくだ」といふことわざもございましたな。どうぞおめぐみ下さい。』
龍王道：「委的沒有，如有即當奉承。」	『なんとおほせられても、ないものはさし上げかねます。』
悟空道：「真個沒有？就和你試試此鐵！」	『ないとおつしやるなら、わたくしは物はためしにここでこの鉄棒をふりまはさせていただきます。』といふので、
龍王慌了道：「上仙，切莫動手，切莫動手，待我看舍弟處可有，當送一副。」	うろたへた龍王は、『まあ、大仙人さま、しばらくお手をお動かして下さいな。わたくしは弟どものところに用意がないか一度問ひあはせませう。一そろひぐらゐありさうなものです。』
悟空道：「令弟何在？」	『はあ、御舎弟がおありでございましたか。』

龍王道:「舍弟乃南海龍王敖欽、北海龍王敖順、西海龍王敖閏是也。」	『南海竜王敖欽、北海竜王敖順、西海竜王敖閏と申す者たちこそ、わが弟です。』
悟空道:「我老孫不去, 不去。」	『そこへとりに行けどおつしやつてもわたくしは行きませんよ。』
俗語謂『賒三不敵見二』, 只望你隨高就低的送一副便了。」	ことわざにも「後の三つより目の前の二つ」とやら、どうしてもこれはあなたから頂きたいと思ひます。』
老龍道:「不須上仙去。」	『大仙人がおいでなさらぬでもよろしうございます。』
我這裡有一面鐵鼓、一口金鐘, 凡有緊急事, 播得鼓響, 撞得鐘鳴, 舍弟們就頃刻而至。」	ここにある鉄のつづみや黄金の鐘をうち鳴らませう。これは非常の場合にうち鳴らすと舍弟どもが立ちどころにかけつけるものです。』と老竜王が悟空をおどかさうとするが、
悟空道:「既如此, 快些去播鼓撞鐘。」	悟空はお人よしの竜王の弟の三人や五人ぐらゐ、ものとも思はないから、『さういふわけでしたら、すぐにもそのつづみや鐘を鳴らしていただきませう。』
真個那鼉將便去撞鐘, 鱉帥即來播鼓。	そこで一匹の亀の大將に鐘を、すつぽんの部隊長につづみを鳴らさせると、
少時, 鐘鼓響處, 果然驚動那三海龍王, 須臾來到, 一齊在外面會著。」	そのひびきもまだきえないうちに三人の竜王があたりに来たとみえて、
敖欽道:「大哥, 有甚緊事, 播鼓撞鐘?」	『兄上、どんな重大事で鐘をお鳴らしなされましたか。』と呼ぶ。
老龍道:「賢弟, 不好說。有一個花果山甚麼天生聖人, 早間來認我做鄰居。後要求一件兵器, 獻鋼又嫌小, 奉畫戟嫌輕; 將一塊天河定底神珍鐵, 自己拿出, 丟了些解數。如今坐在宮中, 又要索甚麼披掛。我處無有, 故響鐘鳴鼓, 請賢弟來。你們可有甚麼披掛, 送他一副, 打發他出門去罷了。」	『弟君、外でもないが、花果山の天生聖人といふのが、わしの仲よしの隣人だといふので兵器をねだつた上に、今度はよろひとかぶとを出せといつて、この場を動かさないで、君がたに来ていただいたが、よろひを一領くれてつかはして外へ追っばらひたいのです。』
敖欽聞言, 大怒道:「我兄弟們點起兵拿他不是?」	弟の竜王は大いに怒って、『我々兄弟で兵を集めて、そ奴をとりこにいたしませう。』
老龍道:「莫說拿, 莫說拿。那塊鐵, 挽著些兒就死, 磕著些兒就亡; 挨挨兒皮破, 擦擦兒勛傷。」	『それはだめだ、それはだめだ。あんなおそろしい鉄の棒を渡してしまつたから、よりつくことも出来はしない。』
西海龍王敖閏說:「二哥不可與他動手。且只湊副披掛與他, 打發他出了門, 啟表奏上上天, 天自誅也。」	『兄上たち、なるほどそ奴に手出しをするのは、よろしくはございませまい。そ奴によるひやかぶとをくれてやつて追っばらつた上で、そのつみを天へ申し上げて天のおさばきをお待ちなされたいかがですか。』と申すのは西海竜王であった。
北海龍王敖順道:「說的是。我這裡有一雙藕絲步雲履哩。」	北海竜王も西海竜王の意見にさんせいして、『わたくしのところには蓮糸の織物で出来た飛行靴が、一足ございますよ。』

西海龍王敖閏道：「我帶了一副鎖子黃金甲。」	『わたくしは金のくさりかたびらを一つ持つてをります。』と西海龍王が言ふと、
南海龍王敖欽道：「我有一頂鳳翅紫金冠哩。」	南海龍王は、『わしは鳳凰の羽根飾のある紫金のかぶりものがあつた。』と言ふので、
老龍大喜，引入水晶宮相見了，以此奉上。悟空將金冠、金甲、雲履都穿戴停當，使動如意棒，一路打出去，對眾龍道：「聒噪，聒噪。」四海龍王甚是不平，一邊商議進表上奏不題。	彼らの兄の老龍王は大喜びで弟たちを水晶宮のなかへ呼び入れて会見し、弟たちのさし出したものを悟空におくつて悟空に帰つてもらふことになった。
你看這猴王，分開水道，徑回鐵板橋頭，攬將上去。	悟空は水中の道をおしわけおしわけはひ出し、水簾洞の鐵板橋のあたりへかへつて来て、水のなかをもぐり出てみると、
只見四個老猴領著眾猴，都在橋邊等候。	四ひきの大猿は小猿どもを引きつれて、皆で橋の附近に待ちうけてみたが、
忽然見悟空跳出波外，身上更無一點水濕，金燦燦的走上橋來。	悟空が波をわけてぬつくりと出たところを見ると、水にぬれたやうすなどはてんでなく、龍宮城でぶんどつて来た金ピカのよろひかぶとを着こんで橋の上へみばつてあらはれたので、
謊得眾猴一齊跪下道：「大王好華彩耶！好華彩耶！」	大猿小猿どもは一度にはひつくばつて、『大王さま、おりつばでございます、おりつばでございます。』とはやし立てると、
悟空滿面春風，高登寶座，	悟空はとくい滿面、意氣やうやうと王座にのけぞりかへつた。
將鐵棒豎在當中。那些猴不知好歹，都來拿那寶貝，卻便似蜻蜓撼鐵樹，分毫也不能禁動。	猿どもはたてかけておいてあつた鉄の棒をもの珍しがつて、みなこのたからものを持ち上げようとするが、鉄の大木にとんぼがとまつたも同じことで、なかなかビクともするものではなかつた。
一個個咬指伸舌道：「爺爺呀！這般重，虧你怎的拿來也！」	猿どもはどれもこれも頭をかきながら、舌を出していふのであつた。『大王さまは、こんな重いものを一たいどうしておはこびなさいましたやら。』
悟空近前，舒開手，一把搗起，對眾笑道：「物各有主。這寶貝鎮於海藏中，也不知幾千百年，可了的今歲放光。龍王只認做是塊黑鐵，又喚做天河鎮底神針。那廝每都扛擡不動，請我親去拿之。那時此寶有二丈多長，斗來粗細。被我搗他一把，意思嫌大，他就小了許多；再教小些，他又小了許多；再教小些，他又小了許多。急對天光看處，上有一行字，乃『如意金箍棒，一萬三千五百斤』。你都站開，等我再叫他變一變著。」	悟空は猿どもの方へ進み出で、手をさしのべて、それをちよつとゆつくり動かして見せながら、みんなに向かつて笑ひながら、この一万三千五百斤の重さのある如意金箍棒は、天の河のそこになつてゐた神品でありながら、ひさしく海のくらにうもれてゐたのをたまたま発見して手に入れた由来を一くさりせつめいして聞かせたうへ、
他將那寶貝顛在手中，叫：「小！小！」	そのふしぎな働きを見せようと、これを手に持つて、『小、小、小。』とい

小！」	って、
即時就小做一個繡花針兒相似，可以搵在耳朵裡面藏下。	ぬひ針ほどにちぢめたところを耳のあなのなかへしまひこんだので、
眾猴駭然，叫道：「大王，還拿出來要耍。」	猴どもはおどろいて大さわざ、『大王さま、もう一度出してお見せ下さい。』といふので、
猴王真個去耳朵裡拿出，托放掌上叫：「大！大！大！」即又大做斗來粗細，二丈長短。	悟空は耳のなかから取り出して手の上のにのせて、『大、大、大。』といふかと思ふと見る見る柵ほどの太さで二丈ばかりの長さになつて来た。
他弄到歡喜處，跳上橋，走出洞外，將寶貝搵在手中，使一個法天像地的神通，把腰一躬，叫聲：「長！」	悟空はこれを 見せびらかして 大とくいのあまり、橋ををどりこえて洞の外へ走り出で、このたからものを手ににぎって、天のごとく地のやうな、神変不可思議を見せてやらうと、こしを一ひねりして、『長。』とさけぶと、
他就長的高萬丈，頭如泰山，腰如峻嶺，眼如閃電，口似血盆，牙如劍戟；	悟空のからだは一万丈もたけがのびて、その頭の先は泰山(支那にある名高い山)の いただきまで とどき、そのこしは泰山をとりかこんだけはしい山のやうにどつしりと見え、目はいなづまのやうにあたりを射てかがやき渡り、口は朱ぬりのおぼんのやうに大きく、きばは劍のやうにするどくなり、
手中那棒，上抵三十三天，下至十八層地獄。	その手にした例のぼうは、上は三十三天のてつぺんにたつし、下は十八層のちごくのどんぞこまでとどくいきほひに、
把些虎豹狼蟲、滿山群怪、七十二洞妖王，都誑得磕頭禮拜，戰兢兢魄散魂飛。	虎や、豹や、狼などあらゆる四足どもをおびやかし、全山のばけ物も七十二洞の妖王たちも皆きもをひやして、 そのみせいに圧倒され 、たまげてぶるぶると身ぶるひをし、頭を地にすりつけて悟空をふしをがむほどであつた。
霎時收了法像，將寶貝還變做個繡花針兒，藏在耳內，復歸洞府。	悟空はわが身の威風と、このふしぎな新兵器の神通力を ちよつとばかり 見せびらかして おいてから、すぐそれをひつこめてもとのすがたになり、棒はもとどほりにぬひ針のやうに小さくして耳のなかへかくしこみ、自分の洞へ帰つてしまったので、
慌得那各洞妖王，都來參賀。	全山七十二洞の妖王たちは 何となくふあんとぶきみで 、そはそはとうろたへながら 水簾洞の大王のところへ 御きげんうかがひに出向いたものであつた。
此時遂大開旗鼓，響振銅鑼，廣設珍饈百味，滿斟椰液萄漿，與眾飲宴多時，卻又依前教演。	すると悟空は旗をおし立て軍鼓をうちならし、どらをひびかせるなど 威力をしめす一方では 、さまざまな御ちそうをどつさり用意させ、やしの水や、ぶだうの汁などをなみなみとくみかはして、おほぜいでにぎやかな酒もりをしばらくつづけてゐましたが、
猴王將那四個老猴封為健將，將兩個赤尻馬猴喚做馬流二元帥，兩個通背猿猴喚做崩芭二將軍。	美猴王悟空は、四匹の犬猿を殊勲者にとりたて、二匹の赤尻大猿は元帥に、二匹の背高大猿は將軍に任命し、
將那安營下寨、賞罰諸事，都付與四	国防や出征、部下のとりたてなどはすべてこの四匹に一任したきり

健將維持。	で、
他放下心，日逐騰雲駕霧，遨遊四海，行樂千山。	王はのんきな気分で、毎日、雲やきりを乗りものにして世界を歩きまはり、天下の山々に遊びくらして
施武藝，遍訪英豪；弄神通，廣交賢友。	武芸の手なみをじまんして、英雄豪傑をあひての武者修行に神通力を見せびらかし、広く天下にすきな友をもとめてまじはつてゐたが、
此時又會了個七弟兄，乃牛魔王、蛟魔王、鵬魔王、獅狒王、獼猴王、獨狻王，連自家美猴王七個。	さまざまな怪獣(ふしぎなけもの)の魔王を六人、それに自分をくはへて七人組で兄弟の同盟をむすび、
日逐講文論武，走罽傳觴，絃歌吹舞，朝去暮回，無般兒不樂。把那萬里之遙，只當庭闈之路；所謂點頭徑過三千里，扭腰八百有餘程。	毎日、学問を語つたり武芸をねつたり、さてはぜいたくな酒もりに歌はせたり、まはせたり、魔王どもはたがひに朝晩行つたり来たりしてたのしみのかぎりをつくした。何しろ魔王たちといふのは万里の遠方もまるで庭さきのかきねのしきり戸みたいなもので、ちよつとうなづいてゐる間に三千里を乗りすぎ、こしをひとひねりすると八百里を一飛びといふ連中ばかりであつた。
一日，在本洞分付四健將安排筵宴，請六王赴飲，殺牛宰馬，祭天享地，著眾怪跳舞歡歌，俱吃得酩酊大醉。	悟空はある日、水簾洞にゐて四匹の大猿掙軍に酒もりのよゝいさせ、同盟の六魔王をまねいて、牛をころしたり馬をれうりしたりして天地の神々を祭り、一座のめんめんは飛んだりはねたり、まひくるつて、うなりわめいて一方ならぬごきげんで、どつさりお酒をのんで、さんざんによっぱらつたすゑ、
送六王出去，卻又賞勞大小頭目。敲在鐵板橋邊松陰之下，霎時間睡著。	六魔王のお帰りを見送り、お気に入りの家来たちをいたはりながら鉄板橋のあたりに来かかり、松の木かげにしばらくうたたねをしてゐた。
四健將領眾圍護，不敢高聲。	四將軍は部下の猿どもを集めて大王を守りかこんで話すにも大声をゑんりよしてゐる。
只見那美猴王睡裡，見兩人拿一張批文，上有「孫悟空」三字，走近身，不容分說，套上繩，就把美猴王的魂靈兒索了去，踉踌蹌，直帶到一座城邊。	美猴王はねむりのうちに二人の者が手に一枚の召捕状を持つてゐて、その表には「孫悟空」の三字が見える。二人の者は近づくと言ひわけを聞かうともせず、いきなりとりなはをかけ美猴王の霊を引きとらへて追ひ立てる。よろよろとよろめきながら、まもなく見なれない城のあたりへつれて来られた。
猴王漸覺酒醒，忽擡頭觀看，那城上有一鐵牌，牌上有三個大字，乃「幽冥界」。	悟空はどうやら酒もさめ気味、顔をふりむけてふと見ると、この城には鉄のがくがかかつてゐて、がくの上には大きな三字が「幽冥界」とあつた。
美猴王頓然醒悟道：「幽冥界乃閻王所居，何為到此？」	悟空は酒のよひも何もふつ飛んでしまつて、『幽冥界といふのは閻魔王のお城のはずだが、何だつてこのおれをこんなところへひつばつて来たものだらう。』といふと、
那兩人道：「你今陽壽該終，我兩人領批，勾你來也。」	『お前は寿命がつきたので王の御めいれいでお前をここへ召しつれて参つたのだ。』と二人の者が答へるのを聞いて、
猴王聽說，道：「我老孫超出三界之外，不在五行之中，已不伏他管轄，	悟空は、『なんだと、この悟空さまは生死の世界をせいふくし、物質界の支配はうけないお方とは知らないか。なんで閻魔などのお世話にな

怎麼朦朧，又敢來勾我？」	るものか。なにをまごついてこのわしをつれて来たのか。』と しかりつけ るが 、
那兩個勾死人，只管扯扯拉拉，定要拖他進去。	二人の者は てんであひてにするやうすもなく ぐんぐんと引つ立てて、 おくの方へつれて行く。
這猴王惱起性來，耳朵中掣出寶貝， 幌一幌 ， 碗來粗細 。	悟空は気みじかの腹立ちつばい性分だから、耳のあなから例のたか らもの の如意棒 をとり出すと、 手ごろな大きさ にして
略舉手 ，把兩個勾死人打為肉醬。	二人の者をうちのめし、たたきつぶして やらうと 、
自解其索， 丟開手 ， 掄著棒 ，打入城中。	しばられてみたつなをときはなつて、 力かぎりに 如意棒をふりまはしな がら城のおくを目ざして進むと、
諛得那 牛頭鬼 東躲西藏， 馬面鬼 南奔北跑。	おどろきおそれた 赤鬼 は西に東に逃げかくれ、 青鬼 は南に北に走り まどふ。
眾鬼卒奔上森羅殿，報著：「大王，禍事！禍事！外面一個毛臉雷公打將來了。」	あたりの 鬼どもはうろたへさわいで閻魔王の森羅殿へ 息せき切つて か けつけ、『大王さま、たいへんでございます、たいへんでございます。 ひげ面の雷さまがあばれこんで参りました。』
慌得那十代冥王急整衣來看，見他相貌兇惡，即排下班次，應聲高叫道：「上仙留名！上仙留名！」	おどろいた地獄王閻魔十王は衣冠(きものやかんむり)をととのへて出 て見ると、いかにも人相のよろしくない人物であつたから、 侍従の列を おしのけ出で 、すぐ高らかに声をかけて、『もしどなたか、大仙人ど の、お名のりなされ。』といふと
猴王道：「你既認不得我，怎麼差人來勾我？」	悟空は、『お前さん、わしを知りもしないで何だつてむかへの者をよこ しなすつたか。』
十王道：「不敢，不敢。想是差人差了。」	閻魔十王が答へて、『いや、それは何ともはや。どうも、きつとまちがひ でせう。人ちがひでせう。』といふ。
猴王道：「我本是花果山水簾洞天生聖人孫悟空。你等是甚麼官位？」	悟空は、『わしは花果山水簾洞の天生聖人孫悟空と申すもの、ところ でお前さんの役がらは何ですか。』
十王 躬身 道：「我等是陰間天子十代冥王。」	『わしか。わしはよみの国の王者、閻魔十王だ。』
悟空道：「快報名來，免打。」	『そんな子供だましはだめです。早くお名のりなさい。容赦いたさぬも のでもござらぬ。』と孫悟空がいふと、
十王道：「我等是秦廣王、 初江王 、宋帝王、忤官王、閻羅王、平等王、泰山王、都市王、卞城王、轉輪王。」	『では、わしらは、秦広王、 楚江王 、宋帝王、忤官王、閻羅王、平等 王、泰山王、都市王、卞城王、轉輪王。』といきもつかず十王の名を ならべたてるのを聞いて、
悟空道：「汝等既登王位，乃靈顯感應之類，為何不知好歹？」	悟空は『ふむ、お前さんが、 ほんたうに その位についてあるのなら、そ の靈感(ふしぎなかん)の力で知らないでよいはずはなからうが。
我老孫修了仙道，與天齊壽，超昇三界之外，跳出五行之中，為何著人拘我？」	わしが孫悟空さまですよ。仙人の道ををさめたのだから天と同じ寿命 で、生死の境界はもう乗りこえて、物質の世界からはみ出してしまつた 身分ですよ。何だつてそれをこんなとこへ引っぱり出されたのか。』
十王道：「上仙息怒。」	『仙人さま、まあさうおいかりなされますまい。
普天下同名同姓者多，敢是那勾死人	天下には名も姓もまったく同じ人があるものです。これはきつと鬼ども

錯走了也？」	がまちがひをしでかしたのでせう。』
悟空道：「胡説！胡説！常言道：『官差吏差，來人不差。』	『何ですつて、何ですつて、まちがひですか。支那ではどこの役所でも時々やらかすものですが、こちらでもそれをやりますか。』と、悟空はけしからぬことどうそぶいて、
你快取生死簿子來看！」	『では仕方ありません。まあ寿命を書きつけた帳面をここに取り出してしらべてください。』
十王聞言，即請上殿查看。	十王は悟空のことばを聞いて、すぐのぼつて行ってしらべて見よと申しましたので、
悟空執著如意棒，徑登森羅殿上，正中中間南面坐下。	悟空は如意棒をしつかりにぎったまま森羅殿に上がりこみ、真正面の王様の椅子にどつかとすわりこんだ。
十王即命掌案的判官取出文簿來查。	十王は帳簿係の書記に命じて帳簿を持って来させる。
那判官不敢怠慢，便到司房裡捧出五六簿文書並十類簿子。	王のめいれいだから聞かないわけにはゆかぬ。おくの書庫へ入つて行って帳面を五六冊とちこんだものを十さつばかりならべたのを、悟空はかたつぱしからしらべさせてみた。
逐一查看：羸蟲、毛蟲、羽蟲、昆蟲、鱗介之屬，俱無他名。	生物や魚などの部類の帳面のなかには名前は見あたらなかつたから、
又看到猴屬之類，原來這猴似人相，不入人名；	さいごに猴のなかまの部を見て行くと、この猴といふものは人間の顔に似てゐるが人間の部類でもなく、
似羸蟲，不居國界；似走獸，不伏麒麟管；似飛禽，不受鳳凰轄。	虎や豹とも似てゐるがこの国のなかにも入つてゐない。鹿や犬などちがつてきりの支配でもないし、では木にゐるから鳥のうちかと思ふと、鳳凰の支配でもない。
另有個簿子，悟空親自檢閱，直到那「魂」字一千三百五十號上，方注著孫悟空名字，乃「天產石猴，該壽三百四十二歲，善終」。	こまったすゑ、別に一さつの帳面があつたから、悟空が自分でそれをしらべてみると、すぐその帳面の魂の字の一千三百五十号のところに、「孫悟空」といふ名が書きこまれて、「天産の石猴、その寿三百四十二歳。善終(大往生)」とあつたのを発見して、
悟空道：「我也不記壽數幾何，且只消了名字便罷。取筆過來。」	悟空は、『寿命をいくつと書きこんだらいいのか自分でもわかりかねるから、まあ名前だけを消しておいてみよう。』
那判官慌忙捧筆，飽搥濃墨。悟空拿過簿子，把猴屬之類，但有名者，一概勾之。	係の役人からいきなり筆をとり上げて、すみをたつぷりとふくませると、悟空は帳面の上をなすりつけてしまひ、猴なかまのうちで名の知れた連中のはみな自分のと同じやうにぼうを引いてしまつて、
摔下簿子道：「了帳，了帳，今番不伏你管了。」	帳簿をおしのけながら、『帳けした、帳けした。こんどからわしはお前さんなんかのやつかいにはならないのだからね。』
一路棒，打出幽冥界。	といつて、そのまま幽冥界をとび出して来ると
那十王不敢相近，都去翠雲宮，同拜地藏王菩薩，商量啟表，奏聞上天，不在話下。	
這猴王打出城中，忽然絆著一個草紇縫，跌了個躑踵，猛的醒來，乃是南	道ばたの草に足をとられてよろめきたふれた、と思つたのがゆめであつた。

柯一夢。	
才覺伸腰，只聞得四健將與眾猴高叫道：「大王，吃了多少酒，睡這一夜，還不醒來？」	
悟空道：「睡還小可，我夢見兩個人來此勾我，把我帶到幽冥界城門之外，卻才醒悟。」	この時、松の根もとでよひざめのゆめに、
是我顯神通，直嚷到森羅殿，與那十王爭吵，將我們的生死簿子看了，但有我等名號，俱是我勾了，都不伏那廝所轄也。」	悟空が寿命をしるしてあった閻魔の帳面をぬりけしておいたおかげで、
眾猴磕頭禮謝。自此，山猴多有不老者，以陰司無名故也。	自分ばかりか大猴なかまは一たい寿命が長くなつたのだといふ事である。
美猴王言畢前事，四健將報知各洞妖王，都來賀喜。	
不幾日，六個義兄弟又來拜賀，一聞銷名之故，又個個歡喜，每日聚樂不題。	
卻表啟那個高天上聖大慈仁者玉皇大天尊玄穹高上帝，一日駕坐金闕雲宮靈霄寶殿，聚集文武仙卿早朝之際，忽有丘弘濟真人啟奏道：	この日、青空の天つ雲居の御所では、朝早くから玉皇上帝はゆつたりと玉座におつきなされて、御前には天上の文武百官の多くの仙人をお召し集めになつて、下界の事どもを御評定遊ばされようとしてをられるところへ、侍従の弘濟真人がおそろおそろまかり出て、
「萬歲，通明殿外有東海龍王敖廣進表，聽天尊宣詔。」	『玉帝さま、ごきげんうるはしうおめでたうございます。ただ今通明殿へ東海龍王敖廣から御きげんうかがひに出まして、玉帝さまに表(上奏文)をたてまつりたいと申しをりますが、いかがいたしませうか。お目どほりをおゆるし下されませうか。』と申し上げると、
玉皇傳旨：「著宣來。」	玉帝は、『ゆるす。』
敖廣宣至靈霄殿下，禮拜畢，傍有引奏仙童接上表文。	敖廣はいそいそと雲居の御所にまゐり、玉帝を拝したてまつつてから、上奏文を、おつかへの仙童(仙人の子ども)にお取次をねがつたのを、
玉皇從頭看過。	やがて玉帝がお目をおとほし遊ばされると、
表曰：「水元下界東勝神洲東海小龍臣敖廣啟奏大天聖主玄穹高上帝君：	
近因花果山生、水簾洞住妖仙孫悟空者，欺虐小龍，強坐水宅，索兵器，施法施威；要披掛，騁兇騁勢。驚傷水族，誑走龜鼈。	前月の事。花果山生まれの水簾洞の主と名のる孫悟空といふ猿のばけ物が、門番をおどかして竜宮城へおしこみ、兵器をねだつてあばれたばかりか、ゆすりがましくふるまつて海中の平和をみだしたために、魚どもはおびえ切るし、かめたちはちぢみあがるといふしまつなどを

<p>南海龍戰戰兢兢，西海龍悽悽慘慘， 北海龍縮首歸降。臣敖廣舒身下拜， 獻神珍之鐵棒，鳳翅之金冠，與那鎖 子甲、步雲履，以禮送出。他仍弄武 藝，顯神通，但云：『聒噪！聒噪！』 果然無敵，甚為難制。</p>	
<p>臣今啟奏，伏望聖裁。懇乞天兵，收 此妖孽，庶使海嶽清寧，下元安泰。 奉奏。」</p>	<p>事こまかに奏上(申し上げる)ことして、海中の平和、水族一同のかうふくのために、この暴慢無礼なくせ者の猿を玉帝の御威光で御成敗のほどねがひ上げたてまつるといふ意味であつた。</p>
<p>聖帝覽畢，傳旨：「著龍神回海，朕即 遣將擒拿。」</p>	<p>玉帝はおそばの者にお思召をおほせられ、『よろしい。龍神よ、竜宮城へおかへり。わしの將軍をさしつかはして、すぐさまその者をせいばつたさせる。』とつたへさせたので、</p>
<p>老龍王頓首謝去。</p>	<p>竜宮王は喜んで玉帝をふしをがみ、おれいを申し上げて退出して行くと、</p>
<p>下面又有葛仙翁天師啟奏道：</p>	<p>入れちがひに侍従長の葛仙翁天師が参内(御殿にまゐつて)して、</p>
<p>「萬歲，有冥司秦廣王賚奉幽冥教主 地藏王菩薩表文進上。」</p>	<p>『玉帝さま、ごきげんうるはしうおめでたうございます。只今地獄の秦広王が地藏菩薩からの上奏文をささげてまゐりました。』</p>
<p>傍有傳言玉女接上表文。玉皇亦從頭 看過。</p>	<p>と、それをお側仕への玉女にお取次をたのむと、やがて玉帝がそれをお取上げになつてお目を通し遊ばされる。</p>
<p>表曰：「幽冥境界，乃地之陰司。天有 神而地有鬼，陰陽輪轉；禽有生而獸 有死，反復雌雄。生生化化，孕女成 男，此自然之數，不能易也。</p>	<p>表には—生死のさかひ目はよみぢで、天には神、地には鬼(死霊)がある。昼夜は車の輪のめぐるやうなもので、生死も言はば昼夜と同じわけのものである。生まれる鳥もあれば死ぬけものもある。これらの事は自然の法則であり、やくそくで、動かしかへることの出来ないものである。このやくそくにしたがらない事は自然の調和をやぶるものである。</p>
<p>今有花果山水簾洞天產妖猴孫悟空， 逞惡行兇，不服拘喚。</p>	<p>それなのにここに花果山の水簾洞にひとりで生まれ出たへんな石猿の孫悟空といふ者がゐて、この自然のやくそくを守らず、わがまゝ勝手のみふるまつて、よみの国の召しにも応じないで、</p>
<p>弄神通，打絕九幽鬼使；恃勢力，驚 傷十代慈王。大鬧森羅，強銷名號。</p>	<p>力にまかせて地獄の鬼たちをなぐりころして閻魔大王を驚きなげかせたばかりか、また宮殿の森羅殿を荒しまはつて、大事な帳簿を引っ張り出してめちやくちやにしてしまひ、</p>
<p>致使猴屬之類無拘，獼猴之畜多壽； 寂滅輪迴，各無生死。貧僧具表，冒 瀆天威。</p>	<p>猿のぶんざいでありながら、永久の生命をもとめ、猿なかまを死なせまいとするなど、まことに天地の運行をさまたげ、自然のやくそくごとをみだすもので、生死の事をつかさどるわれわれども閻魔と地獄にとつて、まことに心外にたへないところである。</p>
<p>伏乞調遣神兵，收降此妖，整理陰 陽，永安地府。謹奏。」</p>	<p>それゆゑ、何とぞ、玉帝さま、この天地のやくそくを守らぬ者、よみの国の謀叛人をこらしめ、地上と地下との調和をたもつために、玉帝の神兵をしばらく地下のよみの国へおつかはしたまはつて、永く天地の</p>

	調和を たもち、生死の大切なやくそくごとを 守らせて下さる事を伏しておねがひ申したてまつる次第
玉皇覽畢，傳旨：「著冥君回歸地府，朕即遣將擒拿。」	といふやうな意味のことが、この上奏文に書かれてあつたのを 玉帝はごらんあそばされて、『よろしい、よみの国の大王よ、めいどの都の御殿へお帰りなさい。わしの將軍を送りつかはして、そのくせ者をたいぢさせませう。』とお思召をおそばの者からつたへさせたので
秦廣王亦頓首謝去。	閻魔の秦広王も 喜んで 、玉帝をふしをがみ、おれいを申し上げて御殿をしりぞいた。
	その時、玉帝はちよつとお顔をくもらせ遊ばされた。といふのは、もともとおなさせ深い玉帝は孫悟空とやらを助けてやりたいとおぼしめたのに、こんな上奏が二つもかさなつたのでは、どうしてもせいばつしなければならぬとお考へになつたからであつた。それで閻魔王が御殿をしりぞくと仕方なく御決心遊ばされ、
大天尊宣眾文武仙卿，問曰：「這妖猴是幾何產育，何代出身，卻就這般有道？」	集つてみた文武百官の仙人がたにむかつておたづねなされた。『 孫悟空とかいふ けしからぬ猿が ゐるといふ上奏があつたが 、どこで生まれて、いつ仙人になつて、どんな事をしてゐる者か。』とおほせ出だされると、
一言未已 ，班中閃出千里眼、順風耳道：「這猴乃三百年前天產石猴。」	列のなかからすばやく進み出た千里眼と順風耳とが、『その者でございますか、それは三百年前に天然に生まれ出た石猿でございます。
當時不以為然，不知這幾年在何方修煉成仙，降龍伏虎，強銷死籍也。」	昔はまだそんなではございませんでしたが、いつのころからでしたやら、どちらかで仙術をしゆぎやういたしまして、ただ今では竜を征服し、虎を打ち負かす不死身の強さでございます。』と申し上げると、
玉帝道：「那路神將下界收伏？」	玉帝は、『どの神將を下界につかはして、そやつをたいぢたものであらうか。』とおほせられた時、
言未已 ，班中閃出太白長庚星，俯伏啟奏道：「上聖，三界中凡有九竅者，皆可修仙。奈此猴乃天地育成之體，日月孕就之身，他也頂天履地，服露餐霞，今既修成仙道，有降龍伏虎之能，與人何以異哉？」	すぐさま列のなかから、すばやく進み出たのが太白長庚星であつたが、ふし目がちに奏上するには、『玉帝陛下、すべて 高等動物は何者でも仙道(仙人の道)をしゆぎやうしてよろしいかと存じます。ましてこの猿は天然に生まれ出て、天と地とがやしなひそだてました者で、体内にはお日さまお月さまの氣がやどつてをりますうへに、天をかんむりにいたゞき地をくつにはいて、つゆをのんだり、きりを食べたりして、今日では仙道もおほよそ出來上がつてをりますから龍をたいぢたり、虎をかうふくさせるだけの力もそなはつたらうかとぞんぜられます。猿ながらも、もはや人間と區別もつきますまい。
臣啟陛下，可念生化之慈恩，降一道招安聖旨，把他宣來上界，授他一個大小官職， 與他籍名在籙，拘束此間。	それ故おそれながら臣のおろかな意見を 御仁愛にあまえて 申し上げますと、一そうおなさせをおかけたまはつて、あの者を宣撫(なつける)してごらんなされたらいかゞなものでございませうか。御じひを申しつたへて天上へおよびよせ遊ばされて、あの者に何なりとちよつとしたお役目をおさづけ遊ばされ、

若受天命，再後陞賞；若違天命，就此擒拿。一則不動眾勞師，二則收仙有道也。」	お役人にお取り立ての上でお役人のきそくを守って手がらをあらはしますやうならば、またおなさけで役がらを上げておやり遊ばすなり、御めいれいにしたがひませぬならば、その時こそめしとつて、ぞんぶんに御しよぶん遊ばされましたならば、第一、天の軍隊を動かすめんだうをはぶくことにもなりませうし、次には仙人になつてゐる者にさうたうした方法かともぞんぜられるのでございます。』と申し上げたのに、
玉帝聞言甚喜，道：「依卿所奏。」	玉帝はお耳をおかたむけ遊ばされて大そう御まんぞくの御やうすに拜せられたが、『その方の申すとほりにいたさう。』と、沙汰があつて、
即著文曲星官修詔，著太白金星招安。	すぐさま太白金星を宣撫お召しかへのお使ひに御任命遊ばされたので、
金星領了旨，出南天門外，按下祥雲，直至花果山水簾洞，對眾小猴道：「我乃天差天使，有聖旨在此，請你大王上界。快快報知。」	金星は大御心を體したてまつり、南天門に出向いて下界に向ふめたい雲を見つけると、すぐさま花果山水簾洞に到着して、多くの小猿たちに申すやう、『わしは天上の玉皇上帝からのお使ひである。玉帝のおぼしめしをつたへたいから、お前がた早くこの大王のところへ知らせて来てくれないか。』
洞外小猴一層層傳至洞天深處，道：「大王，外面有一老人，背著一角文書，言是上天差來的天使，有聖旨請你也。」	洞の外にみた小猿どもが洞のなかへ行つて、『大王さま、表へおぢいさんがひとり来て、せなかに巻物をしよつてゐる人です。天のお使ひで上帝からのおぼしめしをおつたへしたいといふのですよ、大王さま。』といふのを
美猴王聽得大喜，道：「我這兩日正思量要上天走走，卻就有天使來請。」	聞いて悟空は喜びかへり、『さうだらう、わしはこの二三日ほど前から天のお使ひが見えるはずだと思つてゐたら天のお使ひがおいでなすつたのだな。』とひとり言をいつてゐたが
叫：「快請進來。」	急に、『何をまごまごしてゐるか、早くおむかへ申して來い。』とどなりつける。
猴王急整衣冠，門外迎接。	悟空はいそいで身ごしらへをととのへ、禮装で門まで出むかへると、
金星徑入當中，面南立定道：「我是西方太白金星，奉玉帝招安聖旨，下界請你上天，拜受仙籙。」	太白金星はざしきにとほつて南向きに立ち、口調をあらためて申す、『われは西方の太白金星である。玉皇上帝からその方おめしかへのおぼしめしをうけたまはつて推參いたした。その方下界から天にのぼつてお役目をおほせつかうのだ。』
悟空笑道：「多感老星降臨。」	『金星さま、わざわざ下界までのおこし、まことに御くらうでございました。』
教小的們安排筵宴款待。	悟空は太白金星におもてなしをしたいと申し出たが、
金星道：「聖旨在身，不敢久留。就請大王同往，待榮遷之後，再從容敘也。」	金星はぐづくづしてはみられない、天へ行つてゆるゆるお祝ひ申さうと悟空をうながすから、
悟空道：「承光顧，空退，空退。」	
即喚四健將，吩咐：「謹慎教演兒孫，待我上天去看看路，卻好帶你們上去」	悟空は喜び勇んで、あとを例の四匹の大猿にたのんでいふ—『若いやつらをぬかりなく仕込んでおけ、おれは天上から見下してゐるぞ。』

同居住也。」	
四健將領諾。	
這猴王與金星縱起雲頭，昇在空霄之上。	太白金星のぼけ老人と得意滿面の美猴王とは水簾洞のおくから出て來て、同時に雲に乗つてしゅつぱつした。
正是那：高遷上品天仙位，名列雲班寶籙中。	
畢竟不知授個甚麼官爵，且聽下回分解。	